

## 教職等履修学生の教育実践効力感の 尺度開発に関する予備的研究

### Preliminary Study on Development of a scale for self-efficacy to Educational practice in pre-service teacher

渡邊 はるか 枝元 香菜子 藤谷 哲 峯村 恒平 山本 礼二  
(Haruka WATANABE Kanako EDAMOTO Satoru FUJITANI  
Kouhei MINEMURA Reiji YAMAMOTO)

#### Abstract :

There is currently a need to enhance learning opportunities for university students in teacher training while they are gaining practical experience in the classroom. The purpose of this study was to develop a scale for measuring the self-efficacy of the teaching practices of university students in teacher training and school internships.

In a preliminary survey, we posed questions about the self-efficacy for educational practices to 114 college students who were in a teacher-training program for elementary, middle, or high school. An exploratory factor analysis of the survey results identified four important factors: pedagogical knowledge, communication, performance of instruction, and stress coping. In the future, we plan to increase the number of samples and verify the reliability and validity of the study.

キーワード : 教育実践、効力感、尺度

Keywords : educational practice, self-efficacy, scale

#### 1. 研究の背景と目的

中央教育審議会(2015)は、現在の教員養成の課題として、実践的指導力の基礎の育成に資するとともに自らの教員としての適性を考えさせる機会として学校現場や教職を体験させる機会の充実を挙げている。この答申を受けて、改

正された教育職員免許法施行規則では、教職実践に関する科目に学校体験活動(いわゆる学校インターンシップ)が位置づけられた。従来の教育実習に加え、2単位までの範囲で学校体験活動を含むことができるようになった。

これまでも既に愛知教育大学(2017)の

渡邊 はるか : 目白大学人間学部児童教育学科  
枝元 香菜子 : 金沢学院大学文学部教育学科  
藤谷 哲 : 目白大学人間学部児童教育学科  
峯村 恒平 : 教育研究所  
山本 礼二 : 目白大学人間学部児童教育学科

「学校インターンシップの実施による実践的指導力の向上を目指す調査研究実施報告書」で報告された「学校サポート活動」や東洋大学(2011)の「往還型教育システムによる学士力の育成最終報告書」で報告された「往還型教育実習システム」など様々な形で従来の教育実習以外の教育実践の取り組みがなされてきた。こうした各大学において取り組まれてきた「学校ボランティア」や「見学実習」等の科目は、当該位置づけによって更に広まり、教職課程履修学生が学校を実際に経験したり実践したりする機会(以下、教育実践という)が増えていくことが予想される。

これまで、教職等履修学生の教育実践については、主に教育実習を対象として様々な研究がなされてきた。大野木・宮川(1996)は、不安に焦点をあてた教育実習不安尺度を開発し、「授業実践力」「児童生徒関係」「身だしなみ」「体調」の4因子構造であることを明らかにした。その後、多くの研究者がこの尺度を用いた研究をしている。また、その中でも効力感との関係に着目した研究も多くされてきており、例えば、自己効力感が低い学生は教育実習不安が高いこと(枝元・山本, 2017)や、教育実習を通して教師効力感が上昇することで教育実習不安が低下すること(西松, 2008)が明らかになってきている。このように教育実践において、不安と効力感には密接な関連がある。

効力感ということについては、もともとBandura(1977)の自己効力理論以後、効力期待の高さと実際の行動には関係があることや、同じくBandura(1988, 1992)では、効力感がないと不安が高まることや不安の制御には効力感を高めることが有効であることが指摘されてきており、前掲の研究とあわせ、教育実践を通じた学びを充実させていくためには、教育実習を含めた多様な教育実践で使用できる効力感そのものに着目した尺度の開発が必要であると考えた。これまでに子どもの学習や発達に肯定的な効果をもたらす教育的行為をとることが出来るという教師の信念である教師効力感については、様々な研究がなされてきている。教師効力感は、一般的な教師や教育といったものの影響力に関する効力感である「一般的教授効力感」

と自身の教師としての資質・能力に関する効力感である「個人的教授効力感」の2つの側面から捉えることができるとされており、近年では特に個人的教授効力感に焦点をあてた研究が多くなされている(渡邊・中西, 2017)。また現職教員を対象とした研究(白尾・今林, 2005)や教職志望学生を対象とした研究(春原, 2007)がそれぞれ行われているが、どちらも共通して、「学級経営に関すること」「教授・指導に関すること」「児童生徒理解・関係形成に関すること」の3因子構造であることが明らかになっている。このように教師効力感を測定する様々な尺度が開発されているが、いずれの教師効力感も、実際の教育現場で教師に求められる資質・能力に関する内容であり、教職を志望する学生という立場で経験する学生特有の資質・能力に関する内容、例えば指導教諭とのコミュニケーションや研究授業に関すること等は十分に捉えることはできない。とくに、学校インターンシップや教育実習などの教育実践は、卒業後の教員キャリアとの接続が重視されていることや、教師効力感は教員のメンタルヘルスや資質向上とも関連することから、学校インターンシップや教育実習等で利用可能な、教育実践効力感を測定する尺度の開発を行うことを、本研究の目的とした。今回は、項目案を検討するために実施した調査の結果とその結果を踏まえて作成した尺度の予備検討の結果を報告する。

## 2. 研究①(尺度の項目案作成に関する調査)

### (1) 目的

教育実践効力感を測定するための項目を収集する。

### (2) 調査対象

私立A大学で、教職課程を履修し、小・中・高等学校のいずれかの教員免許取得を目指す大学4年生を対象とし、1回目は64名(小学校45名、中・高等学校19名)、2回目は53名(小学校34名、中・高等学校19名)であった。あらゆる不安を網羅するため、教育実習の事前指導前と事前指導後の2回にわたり、調査を行った。

### (3) 調査時期

教育実習の事前指導前の2018年4月初旬と事前指導後の5月下旬であった。

### (4) 調査手続き

教職関連の授業で調査票を配布し、任意で調査協力を求めた。「教育実習に関する不安について」箇条書きで6つ挙げてくださいと自由記述で回答を求めた。

### (5) 分析方法

KH Coderを用いて、階層的クラスタ分析を行った。その結果を参照しながら、研究者5名で協議を行い、項目作成の視点を整理した。

### (6) 倫理的配慮事項

調査を実施するにあたり、無記名調査で個人が特定されないこと、大学の成績や人物評価とは一切の関係がないこと、参加は協力者の自由意志に基づき、協力しない場合でも一切の利益はないこと等を口頭及び文書で説明した。またアンケートの提出をもって同意したものとみなすことを伝えた。

### (7) 結果

事前指導前は、64人から404件の「不安」に関する回答を得た(1人平均6.3個)。事前指導後は、53人(上記64人と重複)から342件の「不安」に関する回答を得た(1人平均6.5個)。計746件の「不安」についてKH Coderを用いて、階層的クラスタ分析を行った。最小出現数7語で分析を行ったところ、対象単語数は59語であった。

その結果、8個のクラスターが得られた。その内容を研究者5名で検討したところ、①人間関係について、②朝起きることについて、③体調管理について、④クラス担任について、⑤コミュニケーションについて、⑥研究授業について、⑦指導案作成について、⑧板書・日誌についてであった。これらのクラスターを参考にしながら大野木・宮川(1996)や春原(2007)の先行研究を参考にし、5名の研究者による協議で、10個の観点を挙げた。①体調管理、②トラブル、③実習日誌、④立場・身だしなみ・マ

ナー、⑤指導教員との関係、⑥実習校の先生方との関係性、⑦児童生徒との関係性、⑧児童生徒への対応、⑨保護者や事務職員との関係、⑩授業力(知識・授業準備・授業実践・授業外指導・研究授業)について、2名がそれぞれ項目案を作成し、5名で協議を行い、最終的には65項目を候補とした。

## 3. 研究②(教育実践効力感の因子構造の検討)

### (1) 目的

教育実践効力感の構造を検討し、作成した項目の中から尺度で使用する項目を精選する。

### (2) 対象

私立A大学及び私立B大学で教職課程を履修し、小・中・高等学校のいずれかの教員免許取得を目指す1年～3年生114名(1年38名、2年20名、3年56名)を対象とした。取得予定免許は、幼稚園・小学校108名、中・高等学校14名であった(取得予定校種の重複含む)。

### (3) 調査時期

2018年12月～2019年1月にかけて実施した。

### (4) 調査手続き

教職関連の授業で調査票を配布し、任意で研究協力を求めた。教育実践効力感に関する質問65項目について、「あてはまる(1点)」から「あてはまらない(5点)」の5段階評価で回答を求めた。

### (5) 分析

65項目について、平均±標準偏差を基準として、5を超えるものを天井効果、1を下回るものを床効果とし、項目分布を確認した。その後、重みづけのない最小二乗法(プロマックス回転)で、探索的に因子分析を行った。分析には、SPSS statistics 24を使用した。

### (6) 倫理的配慮事項

調査を実施するにあたり、無記名調査で個人が特定されないこと、大学の成績や人物評価とは一切の関係がないこと、参加は協力者の自由

表1 削除された項目一覧

体調管理	・体調を崩すことなく、実習を終えることができると思う
	・毎朝、きちんと起きることができると思う
	・毎朝、決められた時間に遅刻せず出勤できると思う
	・体力面では問題なく実習ができると思う
実習日誌	・読みやすい文字で日誌を書くことができると思う
	・きちんとした文章で日誌を書くことができると思う
	・日誌を書く際、一日の実習についてきちんと振り返ることができると思う
立場・身嗜み・マナー	・実習校の先生方に対して、実習生らしい言葉遣いができると思う
	・身だしなみについて、注意されることはなくできると思う
	・実習生という立場をわきまえた振る舞いができると思う
	・遅刻や欠席をする場合、きちんと対応できると思う
児童との関係性・対応	・児童生徒の良いところを褒めることができると思う
	・休み時間に児童生徒とたくさん関わることができると思う
	・児童生徒の名前をきちんと覚えることができると思う
	・児童生徒と十分にコミュニケーションをとることができると思う

意志に基づき、協力しない場合でも一切の不利は無いこと等を口頭及び文書で説明した。またアンケートの提出をもって同意したものとみなすことを伝えた。

表3 因子間相関

	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子	.608	.597	.464
第2因子		.553	.353
第3因子			.380

## (7) 結果

項目分布を確認したところ、全15項目に床効果が確認されたため、削除した。対象となった項目が表1の通りである。

床効果15項目を削除した50項目について因子分析(重みづけのない最小二乗法、プロマックス回転)を行った。因子抽出の基準は、因子負荷量が.40以上であること、複数因子に.40以上の因子負荷を示さないこととした。スクリープロット及び平行分析により、4因子が妥当だと考えられた。4因子と仮定し、再度、因子分析をおこなったところ、17項目が削除され、最終的に4因子33項目が抽出された。これら因子について内容の検討を行い、第1因子【教授知識・技能】13項目( $\alpha = .906$ )、第2因子【対人・関係構築】7項目( $\alpha = .895$ )、第3因子【実習諸活動の遂行】8項目( $\alpha = .873$ )、第4因子【ストレスへの対処】5項目( $\alpha = .812$ )と定義した。なお因子間相関は、表3の通りであった。

## 4. 考察

本研究は、教育実習や学校インターンシップ等の教育実践における効力感を測定する尺度を開発するための予備的研究を行った。項目案を検討し、探索的因子分析を行った結果、「教授知識・技能」、「対人・関係構築」、「実習諸活動の遂行」、「ストレスへの対処」の4因子が抽出された。第1因子は、実習生という立場に関係なく教師一般に求められる知識・技能に関する項目から構成された。一方、第3因子は、同じく知識・技能に関する項目を含むが、「実習生という立場に依存するもの」である点が特徴的であった。第2因子は、児童生徒や教職員との関係構築に関する項目から構成された。第4因子は、研究授業など緊張し、ストレスを感じる場面に関する項目から構成された。

これら教育実践効力感尺度が、先行研究である教育実習不安や教師効力感とどう違うのか比較、考察した結果を整理したものが表4である。教育実習不安(大野木・宮川, 1996)は、「授業実践力」「児童・生徒関係」「体調」「身だしなみ」の4因子で構成されている。「授業実践力」は、「うまく授業をすることができず取り

表2 因子分析の結果

質問項目	1	2	3	4	共通性
33 評価に関する知識は身につけていると思う。	.832	-.074	-.052	.017	.492
58 教師になるための基礎学力は身につけていると思う。	.805	-.060	.121	-.059	.503
47 児童生徒に見やすい文字で板書できると思う。	.746	-.232	.104	-.104	.440
60 正しい文字・書き順で板書できると思う。	.742	.016	-.030	-.033	.517
49 授業中、適切な評価を行うことができると思う。	.667	.024	.107	-.064	.515
20 指導法に関する知識は身につけていると思う。	.630	.172	-.066	.072	.730
8 学習内容についての児童生徒の実態を適切に把握できると思う。	.601	.156	-.132	.160	.262
7 教師に必要な専門的知識は身につけていると思う	.519	.114	-.055	.178	.668
9 授業中、適切な発問をすることができると思う。	.491	.042	.009	.303	.485
51 特別な支援を必要とする児童生徒に対応できると思う。	.480	.145	.126	-.155	.686
46 教材を適切に理解することができると思う。	.466	.047	.313	.007	.552
36 机間指導を適切に行うことができると思う。	.448	-.039	.132	-.109	.498
12 外国にルーツのある児童生徒に対応できると思う。	.415	-.018	-.192	.294	.505
17 指導教員と良い関係を築くことができると思う。	-.118	.908	-.041	.022	.580
43 実習校の教職員方と十分にコミュニケーションをとることができると思う。	-.114	.848	.005	-.019	.290
4 指導教員と十分にコミュニケーションをとることができると思う。	-.089	.763	-.062	.055	.505
56 実習校の教職員方と良い関係を築くことができると思う。	.070	.728	.186	-.203	.590
31 児童生徒と良い関係を築くことができると思う。	.082	.704	-.060	-.036	.222
44 児童生徒から慕われる先生になることができると思う。	.073	.590	.039	.205	.498
6 児童生徒に寄り添い気持ちを理解することができると思う。	.167	.579	-.143	.190	.610
64 指導案通りに研究授業を進めることができると思う。	-.099	-.216	.760	.182	.585
59 授業に必要な資料を集めることができると思う。	.180	-.177	.730	.018	.539
52 実習校の雰囲気を理解できると思う。	.002	.302	.596	-.297	.425
63 課外活動において積極的に関わることができると思う。	.031	.171	.590	-.037	.522
41 毎日、手際よく日誌を書くことができると思う。	.041	.099	.565	.112	.368
62 分からない質問が児童生徒から出た時、適切に対応することができると思う。	.196	-.080	.540	.200	.538
23 適切に時間配分して授業を進めることができると思う。	-.026	.072	.497	.320	.691
24 授業中、児童生徒とたくさん関わることができると思う。	.062	.351	.496	-.081	.672
13 緊張せず研究授業を行うことができると思う。	-.070	.064	-.064	.847	.583
11 緊張せずに授業を行うことができると思う。	-.026	.085	.013	.829	.517
14 睡眠時間を確保できると思う。	-.195	-.098	.359	.628	.497
26 ICT機器を使いこなすことができると思う。	.197	-.145	.059	.447	.482
22 授業が予想外の展開になった時に冷静に対応できると思う。	-.050	.097	.380	.440	.544

表4 先行研究との比較

教育実習不安	教師効力感	教育実践効力感
○ (授業実践力)	○ (教授・指導、 学級管理・運営)	教授知識・技能
○ (児童・生徒関係)	○ (子ども理解・関係 形成)	対人・関係構築
—	—	実習諸活動の 円滑な遂行
—	—	ストレスへの 対処
体調	—	—
身だしなみ	—	—

○：共通するもの、—：該当なし

乱しそうだ」といった項目から構成されており、本研究では、「教授知識・技能」に相当する。「児童・生徒関係」は、「生徒たちとうまくやっていける不安だ」といった項目から構成され、本研究では「対人・関係構築」に相当する。これらは、不安と効力感の双方において共通する因子である可能性がある。一方、「体調」「身だしなみ」に関しては、本研究では、効力感を構成する因子に含まれなかった。表1で示した「体調管理」「実習日誌」「立場・身嗜み・マナー」「児童との関係性・対応」に関する内容は、共通して評価が「あてはまる(1点)」に集中する傾向が見られた。つまり「できると思う」という評価に偏りがあったと言える。自由記述では不安として語られたが、実践に関する効力感としては、差を検出できないことから、項目案の対象から削除することとした。このように教育実習不安と教育実践効力感には、共通点と相違点が見られた。

教師効力感(春原, 2007)は、「学級管理・運営効力感」「教授・指導効力感」「子ども理解・関係形成効力感」の3因子で構成されている。「学級管理・運営効力感」は「問題のある子どもに、クラス全体をめっちゃめっちゃにさせないように指導できる」といった内容で構成されており、本研究では「教授・知識技能」に相当する内容である。また「教授・指導効力感」は「授業で子どもがつかずいた時に、別の説明や例を提示することができる」といった内容で構成され、本研究では「教授・知識技能」に相当する。「子ども理解・関係形成能力」は「子どもと親密な人間関係をつくれるかどうか不安だ」といっ

た項目から構成され、本研究では「対人・関係構築」に相当する。このように春原(2007)の教師効力感と教育実践効力感には共通点が見られた。

本研究で開発を試みた教育実践効力感と教育実習不安、教師効力感との間には、授業に関すること、児童生徒との関係性に関することが含まれる点が共通点として挙げられる。ただし本研究の対人・関係構築に関する因子には、児童生徒との関係性だけではなく、指導教員、実習校の教職員方を含む点が大きく異なる。また実習諸活動の遂行やストレスへの対処も同様に実習生という立場における教育実践特有の視点である。以上のことから、教職課程を履修している学生の教育実践効力感を測定する尺度として、従来の尺度とは異なる新たな視点を取り入れた尺度が開発されたと考える。今後は、サンプル数を増やし、あらためて因子構造を検証すると共に、さらなる信頼性、妥当性の検討を行い、尺度の精緻化を行っていく予定である。

#### 【参考・引用文献】

- Bandura, A (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, Vol. 84, pp.191-215
- Bandura, A (1988). Self-efficacy conception of anxiety. *Anxiety Research*, 1, pp.77-98.
- Bandura, A. (1992). Exercise of personal agency through the self-efficacy mechanism. In R. Schwarzer (Ed.), *Self-efficacy: Thought control of action* (pp. 3-38). Washington, DC, US: Hemisphere Publishing Corp.
- 中央教育審議会(2015). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)
- 枝元香菜子・山本礼二(2017). 「事前授業による教育実習不安の変容—教職志望学生のセルフ・エフィカシーに着目して—」『目白大学高等教育研究』, 23, pp.11-19
- 春原淑雄(2007). 「教育学部生の教師効力感に関する研究--尺度の作成と教育実習にともなう変化」『日本教師教育学会年報』, 16, pp.98-108
- 国立大学法人愛知教育大学教職キャリアセンター・体験学習支援部門(2017). 学校インター

- ンシップの実施による実践的指導力の向上を目指す調査研究実施報告書  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/03/1395666\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/03/1395666_01.pdf) (2019年8月28日アクセス)
- 西松秀樹 (2008). 「教師効力感, 教育実習不安, 教師志望度に及ぼす教育実習の効果」『キャリア教育研究』, 25, pp.89-96
- 大野木裕明・宮川充司 (1996). 「教育実習不安の構造と変化」『教育心理学研究』, 44, pp.454-462
- 白尾秀隆・今林俊一 (2005). 「教師効力感尺度作成の試みと影響要因の検討」『日本教育心理学会総会発表論文集』 47, 336
- 東洋大学文学部教育学科編 (2011). 往還型教育システムによる学士力の育成最終報告書平成23(2011)年度  
<https://www.toyo.ac.jp/ja-JP/academics/faculty/lit/toyopsp/> (2019年8月28日アクセス)
- 渡邊駿太・中西良文 (2017). 「日本における教師効力感に関する研究の動向と展望」『三重大学教育学部研究紀要教育科学』 68, pp.245-254

